

小栗外傳



第三  
之下

^13  
3919  
11





年としの終はつしらはつしくくととややととのれのれは万長ばんちやう夫婦ふうふ見みも幸あひ意いささるるややありありと甲斐かい  
 市いち井いのれ照天てうてん天てん追失おひしつひひににれれ小栗こくり心こころひひるる方かたももあるあるはは此上このうへの尚なほその  
 心こころとと湯ゆ也や永とこくく此こ下した中ちゆう居ゐららああんんと只顧ひまわりその縁えんををななるる然しかはは一いち日にち  
 万長ばんちやうが門かど辺へふふ一ひと人にんのの行ゆき者もの見みりり一いち夜やのの宿しゆくをを求もとめめふふ原はら来きた生なま産うののふふと  
 かくかく六む清せい一いつ人にんと宿しゆくららととれれがが此この世よのの老らう少せうくく病やまるるははああてて返かへ留どまりととれれるる  
 五い三さん日にちにに及およびびるる以もつてて首くび夏なつのの初はつめめとと垣かきのの灯あかり花はな咲さききととてて雪ゆきううとと斗とらうききふふ  
 かくかく山やま郭かく公こう喜きばばてて錦きんととええるる花はなのの山やまもも音おと兼かねふふとといいれれ夏なつぢぢききふふ  
 小栗こくり判官はんくわん代だい助すけ重ちゆうのの何なんんんとと端居たんゐして庭にわのの面おもてををううちちええるるふふ春はるののいいづづとと  
 過去かこてて世よののいいちちちち夏なつ也や初はつめめりりととるるとと猛もう然ぜんととして想おもひひああやや我われ此この地ち方ほうへへ来きたりり  
 三春さんしゆんののちちととめめるるじじとと今けふ卯月うづきのの首くびととかかれればばちちやや一いち月げつはは及およびびるる宿志しゆくし五ご  
 身みのの彩さい光くわう陰いんをを空くうくくここははるるここのの幸さい意いささるるきき速すみふふ此この地ち方ほうをを去さ照天てうてん



小栗亦去向を尋ねて東國の御者と示し合せ早く不懐と遂にのりて  
さるやても小栗邸の御所へ行ける。獨らして居るに小栗を隔く。

風の音にわづらわれてふれり。藤原の里に夜をくらふ。

とち今もりのり。小栗警る。今夏の首より山郭公。行能なるの哥

をこそ吟じて。いふるに。橘衣の音と誦するや。人々をほたることか。あ

けい。とれた庭面の隅の柴折戸をひき。静ふ。あみする。のり。小栗

をこそ。熟る。ふ。五十にのり。弱し。腰を曲め。近よりて。免され。某と

旅の修行者。と。いふ。少く。同ま。い。と。のり。此近。此。里

と。一。雨の。某。前。日。彼。所。を。こ。の。南。村。と。ある。小。家。お。宿。けり。ほ。ろ。不。は

めりける。は。女。房。の。ひ。て。彼。女。房。の。や。と。い。ふ。奴。家。が。ま。は。此。辺。の。長。者。が。許。お

あ。ま。る。縁。故。あり。て。行。往。と。か。る。を。ま。ま。奴。家。が。此。所。に。居。る。を。い。ふ。足。下。の

下。を。修。り。と。歩。み。多。く。なり。彼。所。宿。り。も。あ。り。奴。家。が。此。所。に。居。る。は。し。し

ま。ま。と。い。ふ。れ。は。爾。の。め。れ。と。此。の。明。白。お。告。め。り。ま。や。我。が。ま。ま。と。い。ふ。ひ

からんと。ま。ま。と。い。ふ。と。心。を。ほ。る。と。い。ふ。思。へ。と。余。儀。な。く。頼。む。を。下。お

せん。便。る。と。い。ふ。と。何。と。い。ふ。長。考。も。て。ま。ま。の。名。を。い。ふ。と。い。ふ。と。同。ま

長考の。万。長。と。い。ふ。夫。の。と。い。ふ。世。と。憚。る。と。い。ふ。れ。は。其。名。を。い。ふ。と。い。ふ。と。容。貌。の

如。此。と。い。ふ。と。ま。ま。と。い。ふ。と。熱。く。心。を。ほ。る。と。い。ふ。諸。づ。き。神。仏。と。巡。れ。と。い。ふ。と。宿。り

う。と。足。下。と。い。ふ。と。い。ふ。と。然。る。は。今。般。不。圖。も。足。下。に。い。は。る。と。い。ふ。女。房。の。伝

容貌。に。似。た。れ。り。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。思。ひ。を。い。ふ。と。い。ふ。と。我。が。も。あ。り。て

藤原の。里。に。古。寺。に。吟。じ。の。夢。と。庭。面。の。風。色。を。詠。せ。と。い。ふ。と。爾。の。の

お。い。ふ。と。い。ふ。と。同。ま。と。い。ふ。と。小。栗。を。い。ふ。と。い。ふ。と。我。妻。の。里。に。い。ふ。と

居。る。や。尚。其。の。実。不。は。と。い。ふ。と。再。び。と。用。人。と。い。ふ。と。折。う。と。い。ふ。と。障。子。と。い。ふ。と

居。る。や。尚。其。の。実。不。は。と。い。ふ。と。再。び。と。用。人。と。い。ふ。と。折。う。と。い。ふ。と。障。子。と。い。ふ。と



























書肆衆星閣の主人曾く山水紙好む癖あり。生堂の暇も四方を遊歴  
 あり。名勝の地をこれ毎に其地方の風色名産古器を模写して以て  
 土儀とて半半の。予今年寒燈夜話を編述し後帙第三巻に  
 三洲二村山濃川青墓の里同赤坂宝光院の事を僅小出せり。既にそ  
 稿を脱。衆星閣より後衆星閣これを開く。予謂曰僕遠方乃  
 事知れずと以て今此書も載せし三沢濃川も既に既小出り。粗  
 其の風土を知り。先生の述より其方位大に差なり。予以て  
 想ふに先生の思き人世に又多う候に。幸彼地方の地圖名産亦を写し  
 うれりの。今此書の因りて出づ。知らざる人共も益に  
 とも又害なく願ふ是が考へて。此巻の後小出せられとあり。此  
 此書の大旨も関らばことある。且衆星閣の老彼心を寧ろせんも

不わく。書肆の字を処の國にえり。濃川青墓里同赤坂宝光院  
 の地圖。同寺の古尾を指し。と。二村山の紅葉と秋と。あ。と。と。  
 山をえり。其昔の事。その地の光景推量して。憐れ。蛇足の  
 を忘る。衆星閣の云。予。愚按をり。けて。此。出。ね。  
 二村山。柞。り。と。の。の。説。予。管見の僻説。と。余。  
 多く。衆星閣の述に。と。少く補ひ。のみ。

青墓里と

美濃國 昔の都とあり。此國は青野。大野。各野。とて大なる。その郊あり。とあり。  
 垂井の驛と赤坂の驛の間なり。し。に。驛。に。驛。なり。が。今。小里と  
 なり。青野。と。示。も。此。地方なり。



青墓里の圖

朝長墓

大炊屋敷

青野原

義經苦竹

圓願寺

義朝義平  
朝長之墓

井岳

熊坂墓

清野村

大垣道

物見松

照手の松



夫木青丸うあをある。

伊吹山さしり帝はるほくまをま群るあをさくるる。 為尹

拾玉まをある。

一夜えーくお情まをかくるうふあををるれさ。 急流

この寺よりて考うふ昔まを墓とね女なりとありし驛かへし同里の

うらみ小無井塚といふあり。いまもむし此里に照るといひ遊女あり。

それが墓なりといひはるる。照るが墓と東海道藤沢の驛より。

此所ある墓あると不審。その比あ人の照るありしや。

街道の南人家の後北田間。照るの根といふあり。其木の下にささるる

池あり。傳へる昔照天此里の長が許し興と婢となりて居し。村日毎

この池に死七荷汲めりと。照天をね女なりとせけど。興と婢なりと云

々を想ふ。此説淨福理などより起りしをる。

街道の北山の麓に長者墓といふ木立あり。ふふあり。是此里

の長者大炊が住む跡なり。せ傍に朝長の墓あり。昔平治の亂は源の

義朝戦負く。僅八騎ありて此地方に落ちりぬ。この地の長者大炊と云

義朝交り治りしや。あぐくけ所止まり。冠を被る。討議を倣ふ。

斯く居る。然るに義朝を尾張へ行き。我平の孤軍と赴た。

朝長を信濃より東山。東海の源氏を討つ。不日軍兵大敗す。

余皆の恥を雪ぐんと。既ちうちたんと。然るに朝長矢傷きふと

起て。社に義朝ををる。甲斐なりと。賄ひ。蜜を刺し。殺し。其

こそ。則ちその屍を葬りしふなり。と里人の語り。

街道の端に圓願寺といふ庵室の如き寺あり。其境内に義朝。義平。

朝長二人の墓あり。石の五輪あり。

同寺に後。義朝の芦竹とて木あり。



街道の北相川のむ小寄るれ下坂塚とて小堂あり。然坂を転が  
こころ昔名をるれ空竊盗あり世のよく知る事なれば。こころ  
お好む南の方音野が原の左半町むろり音野の一本松といふ有本  
幣懸松又の名沢物えの松といふ傳へ昔朱雀帝の御宇。東夷  
平将門王命を叛き。下総國相馬郡に居次トて。乱を發せしは是  
退治し。あつる爲南國中山金山太神に祈りて。幣沢此松を  
よ。幣懸松と賞へ。後遠の星霜を待て。仁安加意のころ。ひ  
源林の棟梁然坂長とて。此松より巢穴ト。徒堂集あへて。  
旅客を劫り。其財物を奪ふ。常此松よりて。旅客の事を憂ひ。し  
とぞ。それよりして物見松の名を負ふ。古幣懸松の美名を賞せられ  
今物見松の巧名あり。此木の不幸といふ。古代の松と云。徳年間

大風のうめ吹倒さる。枯る。その後植栽せられ松大木となり  
枝葉榮え。こころ

枝葉榮え

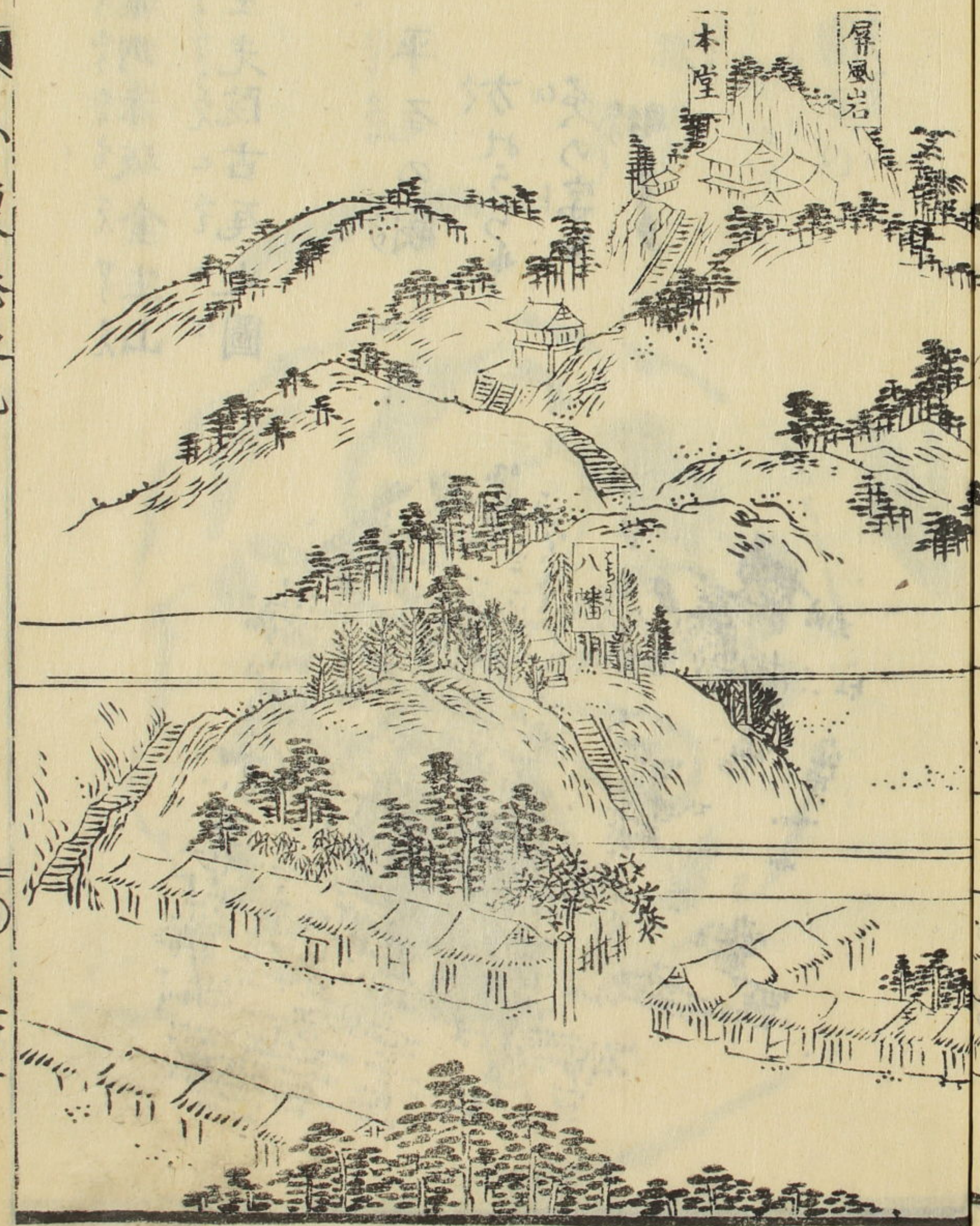
右木とて。處の青墓の圖説と。衆星閣生業のため。前年此  
地方をより折ら。天性の癖あり。こころの事を書ふは。こころ  
粗語社撰。うる年なき。こころ。賈人の俄比の執事  
こころ。其の誤りあり。こころ。

金生山寶光院

濃洲赤坂の驛。北山上あり。真言信我寺。領十石。本尊虚空藏  
菩薩大巖の中。安置と。弘法大師の作。開基も同。毎年三月十二日  
法會あり。



赤坂  
室光院  
虚空藏  
山の  
圖

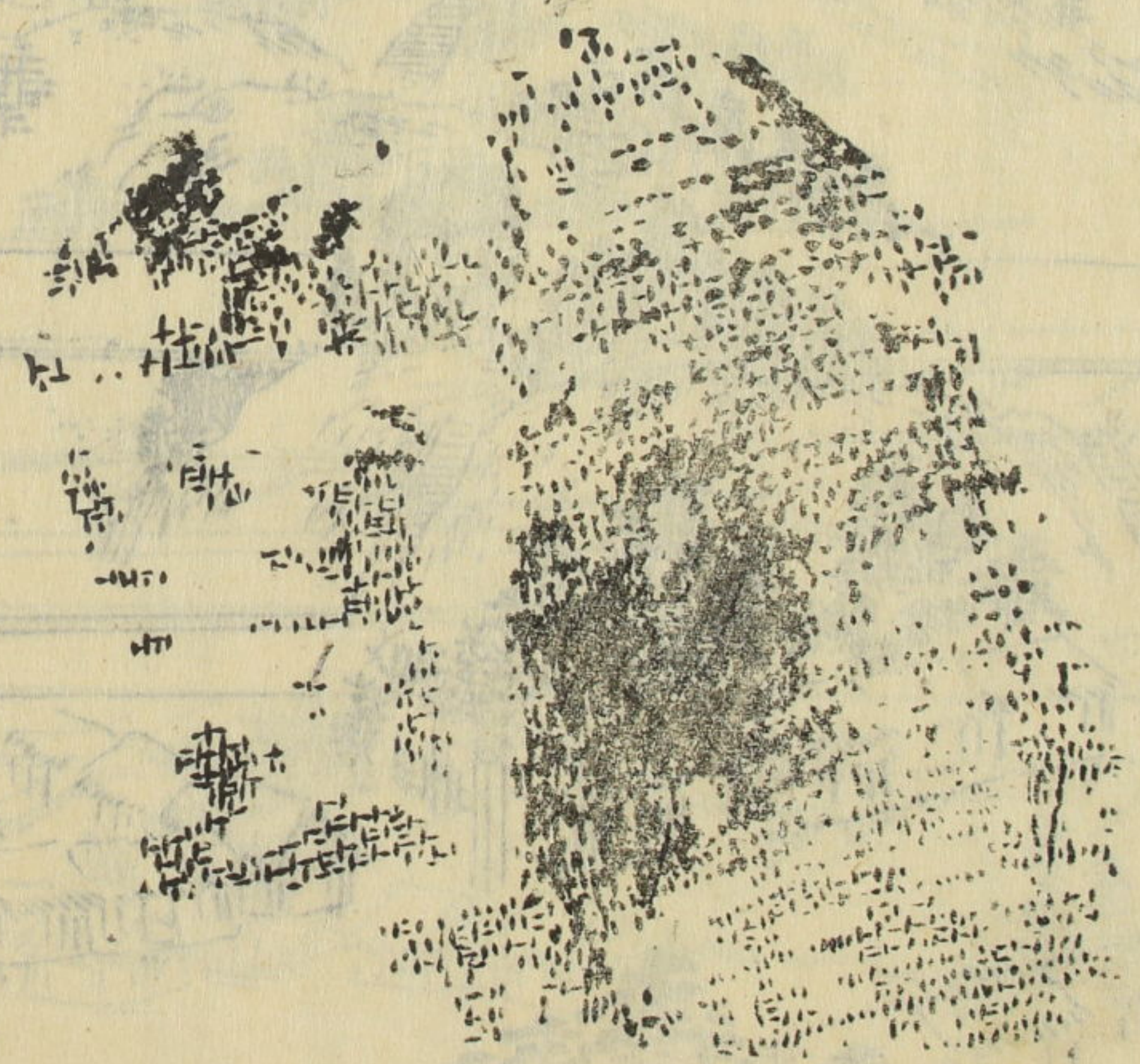




濃州赤坂金生山  
宝光院古瓦之圖

平瓦の圖

方れうち  
瓦の字と  
彫きり



圓瓦の

小口

摺り

けり





同前

平尾の

小口

摺

金箔

金箔

おし

今僅

所

金色

た



一ノ

三十五



鎮之

本

11

山

上

木麿

此明

光緒

之

旗幟

氣

۱۷۱

二

七

紀仁

友

傳

少

二村



歌の流るゝも、ふと一げにひらく。檜の蓋をかへり。又唐錦ふとひらく。錦を一ひら二ひらとふく。足さゆふたれたるものも、續あり。

景物

岩躑躅 いそづつ  
 時鳥 ときすけ  
 照射 しやうしやう  
 志士 しし

紅葉 柿 麓の萩 乙と鳥 里

○ 茲中少と紅毛の書肆衆星閣二村山と

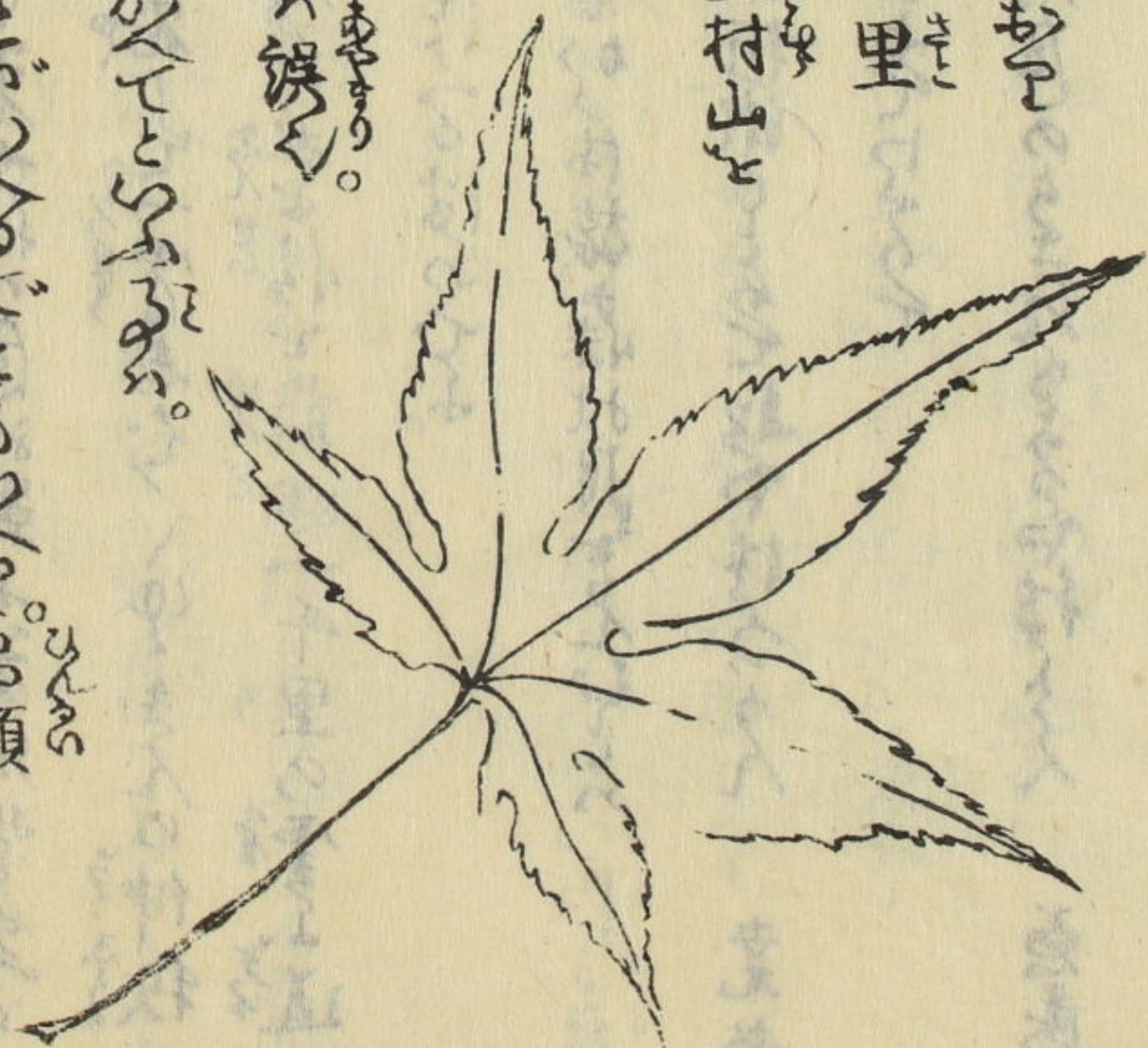
ふふりし其糸を紙に推すと。

空<sup>そら</sup>を摸<sup>も</sup>余<sup>あ</sup>しく観<sup>かん</sup>ん。

○カヘテ機樹きじゆ之楓ふうの字なづかへてと流ながれ誤あやる。

和名抄わなまのしりょう。雞冠木けいこんぎをかくとよあり。かくとよふり。

そと乗かゝるのもふ似てうぐ故に雨もふかくぞともり。品類



甚まき。貝糸いしづな氏の丈あき和本竹もとたけの二十餘種よそよそといふれいと尚なほ多おほきなり。

○此萩も二村山の産やて衆星閣の持するもの。

和名抄及漢語抄うめいそうは鹿鳴州うめいしゅう萩とちくわぎと訓くみせり。え

萬葉集まんえしゅうの牙子うし又榛まんとてとんと訓おのをえ。

貝原氏の大和本艸小天竺花と書てそたと

假名をつり、其冬、花史を引く。

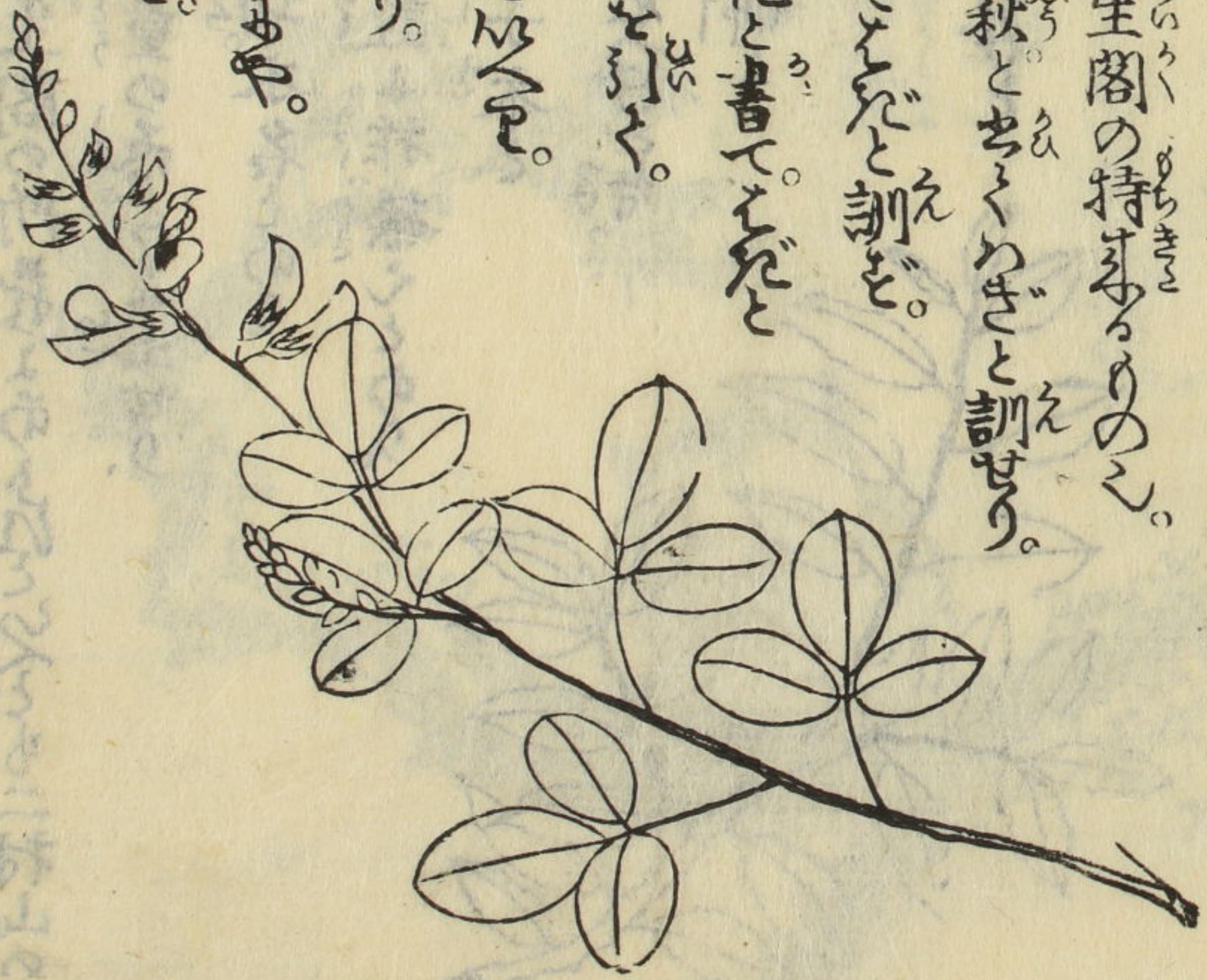
觀音くわんおん。菊きく。天竺てんしつ花はな。是こ。と。之これ。

本邦和歌多く萩と讃じり。

惠山みづのを賣うせむ。

寺の額をこれの寺と図を

有あり平ひら否な





是より後の三國と。衆星閣の所著とあるはとらども。二村山の  
因は柞のことと存はる幼童のゐるも生ぜり。

○柞字彙才落子各二切木名とあり。

詩析其柞薪とある註は柞櫟とあり。

貝系氏の大和本草に數金子木と

書て一名柞といふ假名をいねづと付

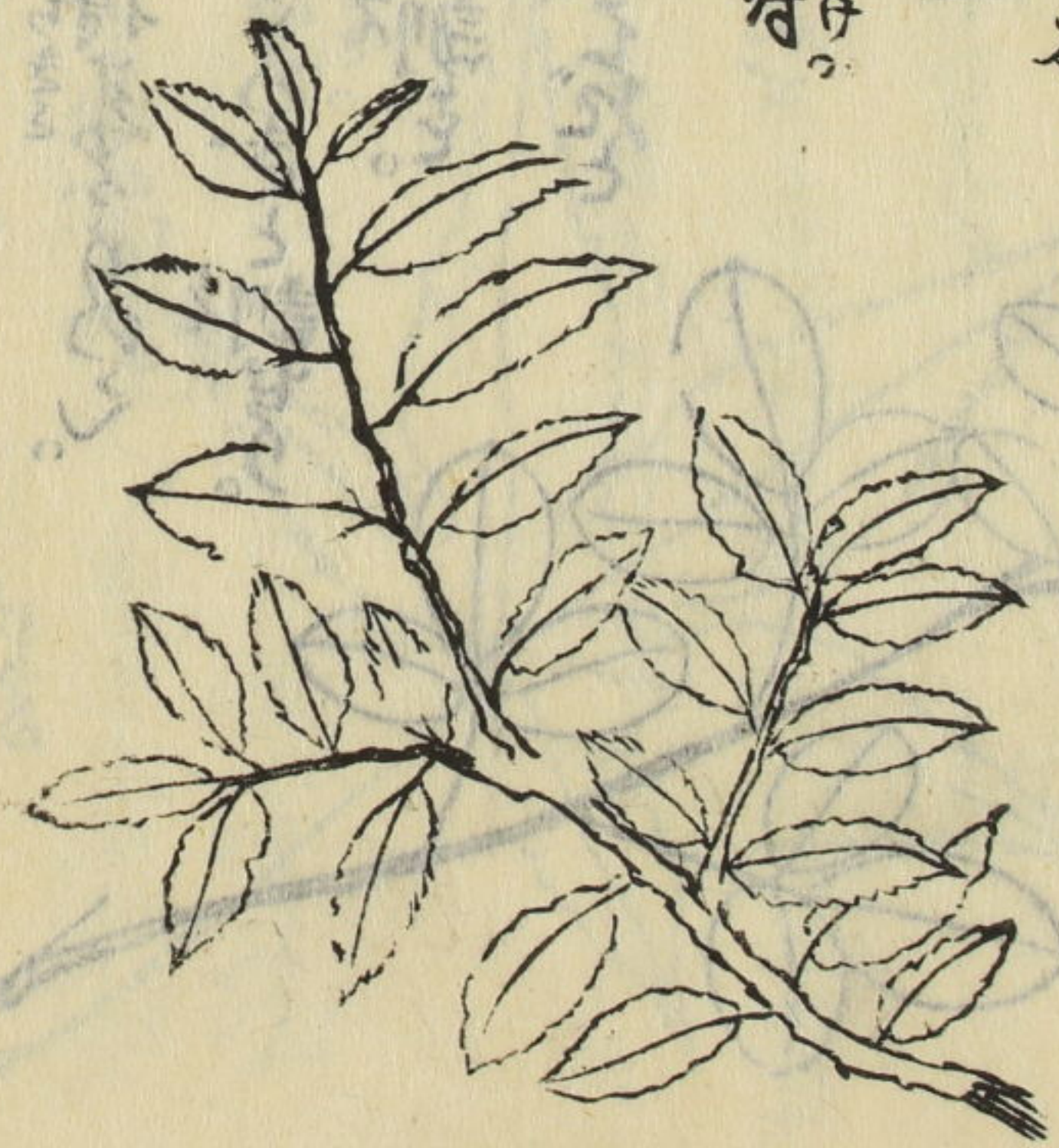
て各々柞と芝楊と似る。柞

作は又庭園の中植山木也。

平原にも生る奴柞をいねづと

訓と存と非なり。

本叶ふ合ととあり。



○とてなり。説くありか何より。ぬれはう。あり。

なと云まで定うありは和名抄とての載と。

字類抄は雀の字と。とてなりと訓たり。

楊子方言に桂林の中謂難曰雀と

つてなり。字彙は雀才恭切。

南楚人難を雀と云とあり。

あつたまど古れあふ

ふくと啼はしと讀る。鴉

翠難との歌ともんく。

今世の何をもふあふん物物の

君子は因て後日詳するものと述ん。





○とり。照射とも。火岸ともま。  
 闇夜も火岸をさして麻の身をを

金葉

うかひ射るるや。

はるはるの影は

うねるを二とりとや

麻を常とん

千載

とりとれやとを妻とちとるや

あひとく麻の身をわかぬん

右の奇をとりとるや。

小栗外傳卷之九畢

